

酒井俊郎の半生

子供の頃、「大きくなったら何になりたいの？」と聞かれると、「野球の選手」と答えていたように思います。それが、大学生になって「卒業後の進路は？」と聞かれると「・・・?」。そんな私が、現在、大学で勤務しています。改めて自分の過去を振り返ってみると、現在に至るまで、多くの「ターニングポイント」がありました。その「ターニングポイント」において、「何を考え、どのように決断に至ったのか」、その一部を紹介させていただきます。



1. 自分のやりたいことは何だろう？

高校生の頃から「自分のやりたいことは何だろう？」と自問するようになりました。その答えは見つかることなく、浪人、大学入学、留年などを経て、大学4年生になりました。ここで大きな「ターニングポイント」を迎えました。「人生の選択」「決断」を迫られました。就職か？修士課程への進学か？十分な判断材料・判断能力もないまま、進学することを決断しました。

2. 研究との出会い

「自分のやりたいことは何だろう？」という自問は続きましたが、明確な答えは得られないまま修士課程へ進学することになりました。修士課程で研究を進めるうちに、その答えが見えてきました。「研究と教育に関係する職業に就きたい」。研究との出会いは、私にとって大きな「ターニングポイント」と言えます。ここで、初めて「大学の教員になりたい・・・?」と考えるようになりました。

3. 夢と現実

「自分のやりたいことは何だろう？」という自問に対して、「研究と教育がしたい=大学の教員になりたい」という答えが見えてきました。しかし、「やりたいこと、やりたいこと=夢」と「できること=現実」との間には大きなギャップがあります。当時の自分には、「大学の教員になる夢」を実現するための能力や自信はありませんでした。そのため、修士課程終了後、「教育」の道を選び、高校の教員になりました。しかし、「研究」に対する未練は大きく、結果として、2年間の教員生活の後、博

士課程に戻ることになりました。

4. 迷走

「研究がしたい」と高校の教員を辞め、博士課程に入学しました。博士課程に在籍中、豊田工業大学教授近藤保先生（元東京大学）のもとでインターンとして研究する機会をいただきました。その後、無事、博士号を取得して、幸運にして豊田工業大学クラスター研究室にて研究員（株式会社コンポン研究所東東京研究室の研究員）として勤務することになりました。「研究」を自分の職業とすることができ、「研究がしたい」という夢を実現したわけです。大変恵まれた環境の中で研究をすることができました。しかし、「このままで良いのだろうか?」「本当に自分には研究する能力があるのだろうか?」と自問するようになりました。この自問に対する答えを見つけるために、研究所を辞め、渡米を決断しました。

5. 米国での挑戦

妻と生後6ヶ月の子供と共に、米国、ニューヨーク州立大学バッファロー校にやってきました。契約期間は1年間、その後の人生プランは全くありませんでした。新たな挑戦の始まりです。時は刻々と過ぎて行きました。限られた時間の中で、これまでとは全く異なる環境の中、「どこまで研究ができるのだろうか?」と焦りの毎日でした。偶然にして、興味深い現象を発見しました。その内容は論文としてまとめられ、渡米してから7ヶ月後に投稿されました。その結果、この研究を継続するために、契約を1年間延長することになりました。

6. 一難去ってまた一難

渡米してから1年半が過ぎると、生活面、研究面共に安定し、米国での生活を楽しんでいました。その一方で、外部予算の獲得に失敗し、契約の更新が難しくなってきました。その後は、数ヶ月ごと契約を交わしながら1年間を過ごすことになりました。その頃から、次の仕事を探すようになりました。日本の大学へ応募書類を送り、その返事を待っていました。しかし、一通も返事は来ませんでした。ちょうどその頃、第二子が生まれ、二人の子供と妻の家族4人の生活を維持していくためにも、安定した収入が必要でした。そこで、米国内での就職活動を始めました。必死に情報収集をして、エントリーをしました。しかし、なかなか面接のオファーは来ませんでした。

7. 悪魔？のささやき

ニューヨーク州立大学での雇用契約は、残すところ2ヶ月に迫ってきました。そんなときに、2つの面接のオファーがやってきました。その後、幸運にして2つのジョブオファーが来ました。企業からのオファーを受けることを決断して、ビザの書き換えの準備を始めました。ビザの書き換えのために、日本の大学の先生方に推薦書の作成をお願いしました。先生方には推薦書の作成を快くお受けいただきましたが、一方で、先生方から「大学の教員にはならないの？」「日本には戻ってこないの？」と問いかけられました。「何のために米国に来たのだろうか？」、改めて自問してみました。「大学で研究・教育がしたい？」。生活を維持していくことに必死で、自分の夢を諦めつつありました。

8. 決断

「背に腹は代えられない」。夢ではご飯を食べることはできず、家族を養うこともできません。そのため、多くの場合、現実を直視し、夢を諦めて、安定な生活を維持することを選択します。「日本の大学で研究・教育をしたい」という自分の夢を実現するためのジョブオファーはなく、「家族で幸せな生活をする」という夢を実現できる米国の企業

からのジョブオファーが目の前にあります。普通、後者を選択するはずですが、私は悩みぬいた末、米国の企業からのオファーを断り、日本に帰国することを決断しました。「日本に帰って就職活動をしよう」。その当時、上の子供は3歳、下の子供は0歳でした。妻はほとんど呆れていました。

9. 日本での再出発

帰国はしたものの、行く宛てもなく、実家に居候することになりました。恩師であります東京理科大学教授阿部正彦先生のご厚意により、東京理科大学にて研究員として勤務させていただき、日本で再出発することができました。東京理科大学での1年半の研究員の後、信州大学ファイバーナノテク国際若手研究者育成拠点の助教として採用されました。5年間のプログラムの後、2012年4月から信州大学工学部物質工学科に正規採用され、人生初めての定職に就くことができました。

10. おわりに

改めて自分の半生を振り返ってみました。「身の程知らずにも程がある」「そろそろ人並みの人生を歩みなさい」と言われながら、日本人男性の平均寿命の半分が過ぎました。思いつくままに行動してきた結果、少し人生を遠回りしてしまったかもしれません。道草をしすぎたかもしれません。子供の頃、「道草しないで早く帰ってきなさい」とよく言われました。しかし、道草には多くの発見、出会い、そして喜びがあります。「全力で道草してもいいよね」とささやくもう一人の自分がいます。「将来のことや損得ではなく、今、自分がやりたいことに全力を尽くそう」。如何なる道であっても「今を全力で生きる」ことが「未来を切り拓く」と信じて、これからも進んでいきたいと思えます。最後に、こんな私を、これまで支えてくださいました妻、両親をはじめとする多くの方々に心より感謝申し上げます。